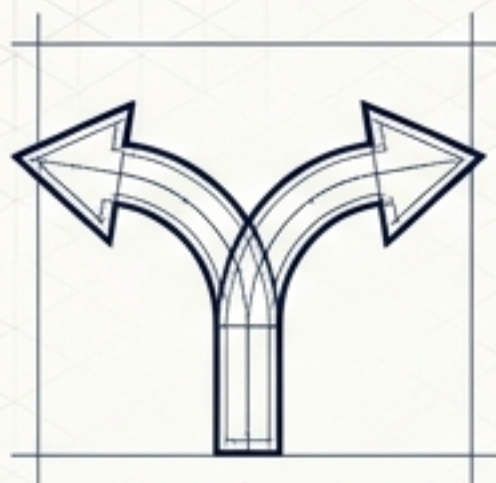


[CONFIDENTIAL / INTERNAL GUIDANCE]

次世代AI画像生成モデル 知財実務導入プレイブック

Nano Banana 2.1 vs. GPT Image 2.5 — スペック比較から法的制約、
社内ガイドラインまで (2026年10月版)

AIは最終成果物を生み出す『魔法』ではない。 構想とプロセスを劇的に加速する『高度なドラフター』である。



性能とコストの二極化

Nano Banana 2.1（安価・大量の文脈処理）とGPT Image 2.5（高精度・精密編集）は用途が完全に分かれる。



知財補償の限界

ベンダーの補償は「最後の安全網」に過ぎない。出力の改変や商標利用は補償の『盾』の外にある。



創作的寄与のボーダーライン

特許図面の清書や意匠の最終案には使えない。人間の「創作的寄与」と「社内限定管理」が必須。

2026年9月8日公開



GPT Image 2.5

Flare (標準・低遅延)

Sunburst (精密・低速)

待ち時間最大50%短縮。Sketch機能 (手描き下絵の参照)、被写体保持、精密な部分編集を追加。

2026年10月6日公開



Nano Banana 2.1

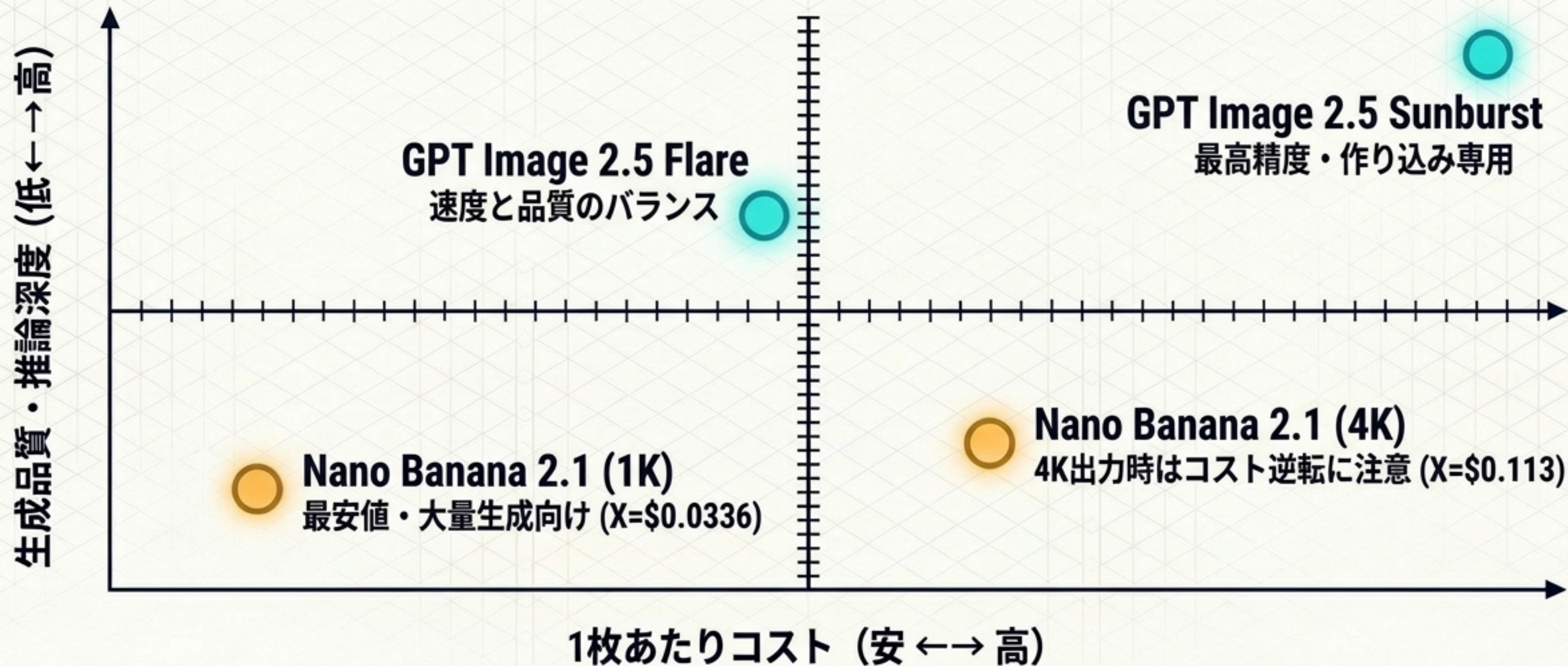
Gemini 3.6 Flashベースへ進化。出力単価半減 (\$30/1M Tokens)。マスク指定の部分編集追加、極端な縦横比 (1:8) に対応。インフォグラフィックの精度向上。

Nano Banana 2.1 vs GPT Image 2.5：主要機能比較

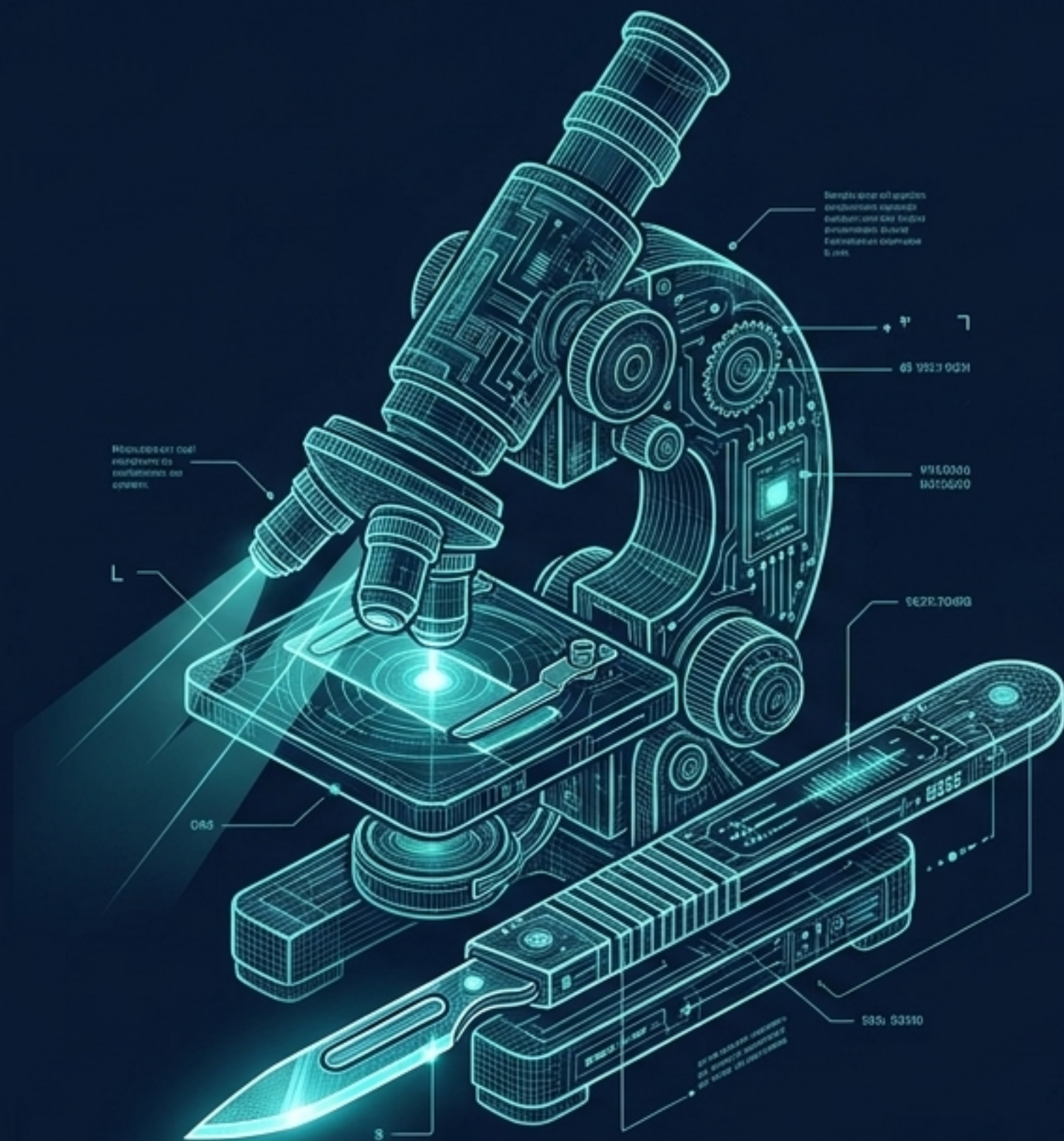
評価項目	Nano Banana 2.1	GPT Image 2.5
最大解像度	1K / 2K / 4K (極端な比率1:8対応)	最大 3840×2160 (カスタム指定)
コンテキスト上限	最大100万トークン	非公開
編集機能	マスク / 手描き指定	エンドポイント最大16枚, コメント指定, Sketch
検索グラウンディング	あり (Google検索連動)	未確認 (画像単体)

大量の文書・参照画像を
読み込ませる図解作成に
おいて圧倒的優位

既存画像の一部差し替
えや、部品の同一性を
保った精密編集に特化



【投資対効果の視点】社内導入時は『1枚あたりの単価』ではなく、
打率を含めた『採用された1枚あたりのコスト』で評価すべきである。



GPT Image 2.5 = 『顕微鏡とメス』

コンテキスト
上限
(大量文書)

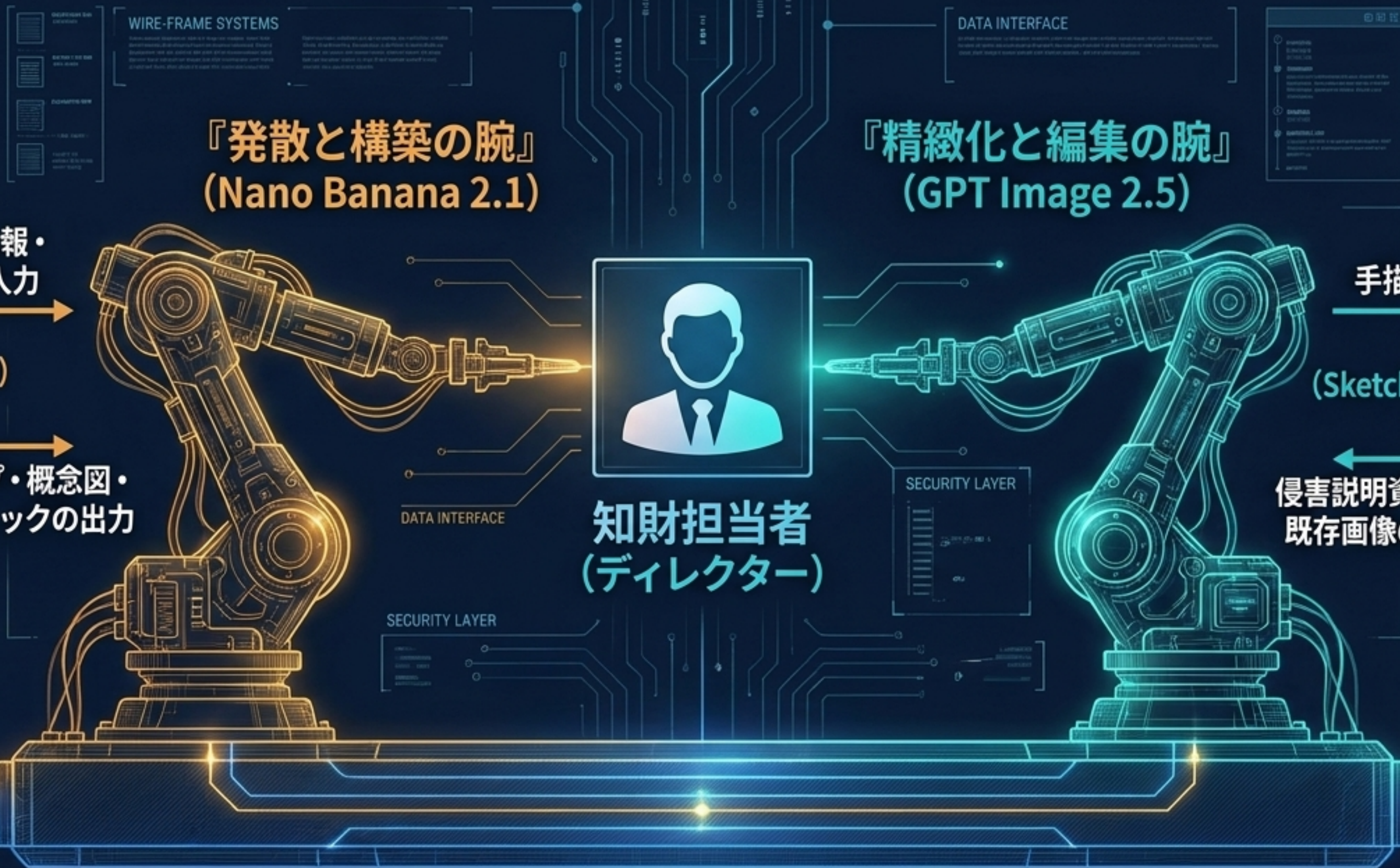
被写体の保持力

精密な
部分編集

コスト
(最高品質時)

複数ターンの
一貫性

【Insight】 Sunburstモデルによる作り込みは強力だが、単色背景での乱れなど、特許図面に直結させるにはまだ不安定な要素が残る。



共通の基盤：不可視の透かし (SynthID / C2PA) による来歴管理

補償除外（リスク領域）

- ⚠ [WARNING] 出力を改変した場合（無改変条件の違反）
- ⚠ [WARNING] 商標としての商業的使用
- ⚠ [WARNING] 権利者からの通知後の継続使用

補償対象（安全圏）

- Google Cloud Agent Platform経由での利用
- OpenAI API / Enterprise経由での利用
- 出力そのままでの第三者知財侵害に対する請求

補償除外（リスク領域）

- ⚠ [WARNING] 出力を改変した場合（無改変条件の違反）
- ⚠ [WARNING] 商標としての商業的使用
- ⚠ [WARNING] 権利者からの通知後の継続使用

【Insight】ベンダーの補償は、素のままの出力をそのまま使う場面の『最後の安全網』。知財実務において出力を無改変で使うケースは稀であり、自衛が前提となる。

1. 著作権 (Copyright)



Thaler v. Perlmutter判決 (2026.3)。AIが表現要素を決めた画像は保護対象外。人間の創作的寄与が必須。

2. 意匠法 (Design Law)



特許庁検討 (2026年改正目処)。自社がAIで大量に生成・公開したデザイン案は公知意匠になり得る。社内限定管理が必須。

3. 商標 (Trademark)



現行制度で登録自体は可能だが、他者の商標や著作物との抵触リスク大。発想出しに限定すべき。

4. 特許 / 発明者 (Patent)



日米とも発明者は「自然人」。AI作成図面は表現の補助に過ぎず、発明者の認定には影響しない。

日本・プリンシプル・コード (2026.8) への対応状況・
情報開示が、今後のAIベンダー選定の鍵となる。

Phase 1: 構想・発想 (Ideation)
【AIフル活用】

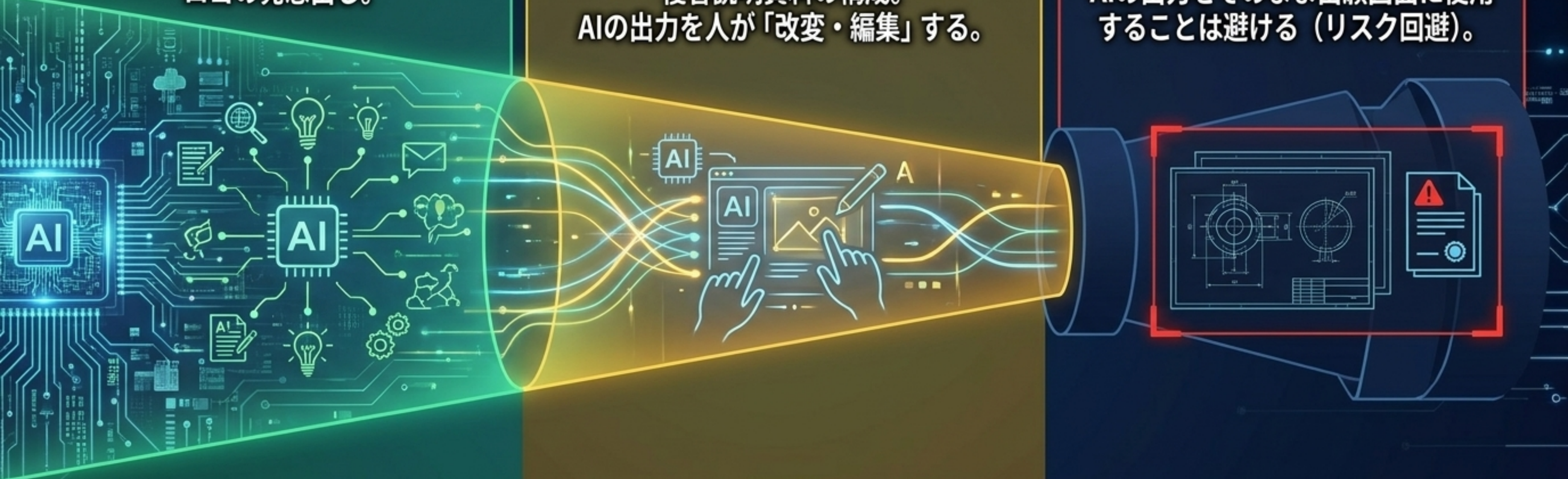
IPランドスケープ、概念図、
ロゴの発想出し。

Phase 2: たたき台・レイアウト (Drafting)
【AI・人協働】

手描きラフのクリーンアップ、
侵害説明資料の構成。
AIの出力を人が「改変・編集」する。

Phase 3: 清書・権利化 (Finalization)
【人間主体 / CAD必須】

特許図面・意匠図面の最終案。
AIの出力をそのまま出願図面に使用
することは避ける（リスク回避）。



**日本・プリンシプル・コード（2026.8）への対応状況・
情報開示が、今後のAIベンダー選定の鍵となる。**



経営層向け資料・
IPランドスケープ

判定：Nano
Banana 2.1
(Agent経由)

安価・インフォグラ
フィックに強い・検索
グラウンディング。



発明者ラフの清書・
侵害説明レイアウト

判定：GPT Image
2.5 Sunburst
(量産時はFlare)

精密編集・Sketch機
能によるレイアウト保
持力。



特許図面・
意匠図面の清書

判定：どちらも
使用不可
(CAD/ドローツール使用)

AIは構図のたたき台
まで。最終的な人間の
創作的寄与を担保する
ため。



ロゴ・商標の作成

判定：発想出し
のみに限定

商標としての商業利用
は補償対象外。採用候
補は必ず商標調査と類
似性チェックへ。

日本・プリンシプル・コード (2026.8) への対応状況・
情報開示が、今後のAIベンダー選定の鍵となる。

優れたAIは、劣ったプロセスの 代用品にはならない。

2026年、AI画像生成は『品質』から『統制と統合』のフェーズへ移行した。
Nano Banana 2.1の広域処理とGPT Image 2.5の精密操作を正しく使い分け、
人間の「創作的寄与」をプロセスに組み込むことこそが、
次世代の知財部門における最大の競争優位性となる。

[END OF DOSSIER]

2026 Intellectual Property Strategy Framework